

白 垂 の 空

有 森 信 二

雨が降り続けている。

汚れたガラス窓を透かすと、白い雨の粒はかすかに見えるのに、空に五センチばかり開いた空間にはなにも映らない。わずか五センチばかりの空間を、巧みに避けて降る雨なのだろうか。

ぼくは酔っている。一人で、ボトルの半分をあけたのだ。

雨は、耳の奥にまで染みわたる音で、絶え間なく降っている。ときおり、窓の下の紫陽花の葉を音たてて揺らすのは、単調に見える雨粒の中にも、青臭い反逆児たちが混じっていて、あわただしく降り急いだりするのかもしれない。

眠くない。むしろ、蒼ざめてくる思いがある。

といって、二階の大学院生みたいに床を踏み鳴らしたり、咳払いを続けたりはしない。

蛇を見ている。天井と壁の境い目の染みの浮き出たあたりに、一匹の蛇がはりついている。じつと動かない。そいつが、ぼくを無視したように、ちつとも動かない。「どこからきた」と訊いても、身じろぎもしない。

馬鹿にしている。

何度も見たハガキを、またひっくり返してみる。「六月十八日

(土)、参禅会においでください」とある。今田のやつめ、なにを説教しようというのか。こんな口実でゼミにおびき出そうたって、そうはいかない。

すっかり透明に近くなったコップに、重い液体を注ぎ足す。指の腹に粘りついてくるボトルの震えを感じながら、ゆっくり注ぐ。液体はいったんコップの中で尖り、絡まり、膨らみ、やがてぼんやりした雨の色にふやけていく。

ベルが鳴っている。

屋根の上の、雲の中でも鳴っているみたいに、高く低く響いてくる。と思うと、土中の深くか、遠い記憶の中でも鳴っているかのように、かすかに垂れ込めてしまう。切れ切れに、そして、ふつと途切れたかと思うと、しようこりもなくまた繰り返す。

昼間はいつも寝ていて、夕方になると目を覚ます二階の大学院生の部屋なのだろうか。でも、あいつならベルでなど起きるものか。熊みたいな男だから、腹が減らなきや薄目さえ開きやしない。

もしかしたら、隣の工学部の男の部屋なのかもしれない。この下

宿では珍しく目覚めのいいやつだから、朝のベルをONにしたまま出かけたのだろうか。だとしたら、いつまでも鳴り止まないことになる。

二年近くもこの下宿にいて、ぼくは二階は勿論、苔むした小さな庭石をはさんだ斜め向こうの部屋の前にすら立ったことがない。だから、迷路みたいに折れ曲がって続く廊下の奥の住人たちとは、玄関で出交わしてもわからない。

そのかわり、廊下を往来するスリッパの音には敏感になっている。忍び音に鳴らすやつの声はハスキーで、派手に慣らすやつはいつも女を連れてくる。大股で歩くのは、意外なことに入学したばかりの女子学生で、急ぎ足なのが隣の工学部の男、という具合だ。

「幸田さん、コーダさん」

ふいにドアが鳴った。間近で落雷でもしたのかと思った。ぼくにはそう思えるほど、激しい衝撃が板戸に打ちつけられている。

いつの間にか、畳の上に眠っていたのだったろうか。しかし、眠くもないのに眠ってしまう筈はない。それにしても、ベルの音が止んだのに気付かなかったのはうかつだった。

「いないのかしらね、本当に」

苛ついた女の声がある。下宿の婆さんの声だ。思いっきりドアを叩く。手加減というものがない。あとに、ぶつくさ声が続く。

「ほれ、いるわけないだろ。しつこいんだからねえ、こんな時間に」
講義をやっている真昼間に、下宿になどいる筈がないという意味なのだろうか。「いい加減にしておくれよ、もう」と、とびきり激しい衝撃をくれて、彼女は立ち去りかけた。

「今田さんからのハガキ、届いたでしょう。面白そうだから、わたし行ってみる。邦彦さんは。あら、酔ってるの」

祐子だった。

「詩が書けないんでしょ。当たってる。とにかくね、わたし行ってみる。今田さん、一生懸命なんだから。少しおっくうな気もしないじゃないけど、経験だしね。明美も一緒よ」

祐子の声が目の前を回る。受話器が妙に軽い。二階への上がり口の木目のひねくれた柱が、七十度ばかりに傾いて見える。

暖簾の向こうに、大家の台所があげすけに舞台裏を見せている。婆さんが腰をかがめ、油のなかに骨付きの肉を落としている。その肉のはぜる臭いが、澱んだぶ厚い層となって胸のあたりまで漂ってくる。

「詩が書けない、冗談じゃないよ」

「あら、また『なんとかザウルス』に角はあったか、なんて悩んでるのかと思ったわ。ほら、古生代の」

「中世代だ」

「そう、白亜紀だとかなんとかいってたわね。で、今度の「なんとかザウルス」は空を飛べるの」

テレビの中の怪獣じゃあるまいし、そう簡単に空が飛べてたまるものか。なにしろ、五十トンもある凄いやつだ。

「そいつの頭は、ビルの高さほどある」

ぼくがそういったとき、自分自身の影がふいにゆらりと足元から浮き上がり、ぼくはあつという間に、その「なんとかザウルス」になっってしまった。「なんとかザウルス」のぼくは、ぬらりと光る鎌首をもたげ、のっそり湖から上がってくる。レイクホテルなんてひとたまりもない。デパートだって、大学街だって一またぎで揺らしてしまふ。

「そいつだって、死んじまうんだ」

「ふうん、面白そうじゃない。どういうふうに死んでしまふの」

「骨さえも残らないんだ」

吐き気がした。五十トンもある巨大な自分の肉塊が、朽ち落ちていくさまが眼の前に浮かんだ。

台所の方から、なにかスパイスを混ぜ合わせているのか、くしゃみを催しそうな強烈な臭いが、一際強く流れてきた。せわし気な皿のふれ合う音も聞こえる。

「山に行くかったって、じっと座っているだけじゃないか」

「不満そうね。誰も無理に勧めようなんていってないのよ。今田さんだって、好きで世話やいてるんじゃないんだから。でも、明美の方はちよつと乗り気なのよね」

「石井や村上は行かないの」

ぼくは、西村ゼミの連中の名前をあげた。

「多分駄目ね。毛並が違うんだもん」

ケラケラと祐子は笑った。

「単位には関係ないのよ。ツネプロも明言したでしょう。こいつは俺の及ぶ範囲じゃないって。彼ら、要領いい方でしょ」

ツネプロのプロとはプロフェッサー、ツネとは西村経頭（つねあき）、つまり西村教授のことである。経頭などという、いかにもお寺にでも係わりのありそうないかめしい名前をもつ西村教授は、その実、宗教などとは全く関係がない。専門は東洋経済史で、仮に一向一揆というテーマでゼミをやる場合でも、苔むした階級理論でものごとを割り切ってしまう。

実際、「こいつこそが、まさに収奪の証だ」といって、虫の食った江戸時代の人足帳というボロくず同様の古文書を、毎日毎日、飽きもせず眺めている。

実のところ、ぼくは西村ゼミに入ったのを後悔している。はなか

ら結論が読めてしまうのだ。世の中には強者と弱者がいて、その強者が弱者を抑圧するか、弱者が強者に抵抗するかの過程だけしか歴史ではない、と思っているふしがある。

おまけに、その前と後の部分が欠落している。つまり、西村教授の理論には、中世代もなければ三百年後もない。ただか六千年来の出来事を飯の種にして、それを金科玉条のごとく押し付けてくる。だから、不快さを露に顔に出すべくより、適当に研究室に出没する石井や村上の方が受けがいい。

しかし、そんなことで酔っているんじゃないぞ。

ぼくの頭の中には、三十億年前のことや、五十億年後のことが、びっしり詰まっている。

「一時間も、二時間も、ただ、じっと座っているだけというじゃないか」

「それで十分じゃない。ツネプロだって、そいつは意義がありそうだなって、この頃神妙なんだから」

「ツネプロがねえ」

そのとき、暖簾の陰から婆さんがぼくを睨んでいるのに気付いた。「いつまで長々と喋ってるの」と、いつもこうだ。そのくせ、一部始終に耳をそばだてている。壁に耳あり、などというものではない。下宿人なんて、半人前以下のやつかいものとも思っているらしく、遠慮など露もみせず、容赦なく踏み込んでくる。

「あたしゃね、嫌な目に会ってるんだよ。また家の中じゅうひっくり返されたら、たまったもんじゃないからね」

婆さんは、いまでも昔のことを執拗に覚えていて、新しい入居者が来る度にこうつけ加えるのを忘れない。なんでも、三十数年前の学園紛争のさなかに過激派の内ゲバに遭って、壁もふすまもガラスも全部やられたらしい。

「まさか、そういうのじゃないだろうね」

類いにもれず、ぼくもその尋問の洗礼を受けている。もし仮に、そういう「危険人物」がいたとしても、自分から名乗り出る筈もないのに、とバカらしくなってしまう。

婆さんがテーブルを叩き始めた。これ見よがしに高い音を立てる。

「なにか」

「なんでもない」

ぼくは、受話器を手に包み、婆さんにクルリと背を向けた。その途端、喉の奥から生温かいものがこみ上げてきた。

本当に吐き気が突き上げてきたのだ。ぼくは、腹の底に澱んだものを、そこらにぶちまけてしまいたい衝動にかられて、あわててしやがみ込んだ。ぼくをとり巻くあたりの空気が、悪意に満ちた濃密さでまっわりついてくる。みぞおちのあたりに、熱い塊とひいやり

した塊の部分とがあつて、互いあいられない。主張で、相手の出方をうかがっている。

「気が変わったら来てよ」

宮田町というバス停で、バスを降りた。

今田からのハガキに、「瑞光寺（M郡宮田町）。午後一時、文系玄関に集合」とあつたのを無視して、ちようど通り合わせたバスに一人でとび乗ってしまった。

気が変わったから来たのではない。日頃から、マンドリンとテニスのほかにはなにもなさそうな祐子や、唯物論至上主義の西村教授たちが、都心から四十キロも離れたこの山奥の寺まで来て、いったいなにを始めるというのか。その行方を覗いてみたくなっただけのことだ。

ぼくの頭の中には、祐子からの電話があつたときから、蛇が棲みついてしまっている。

あのととき、自分の部屋に這い戻つて、ぼくは洗面器にヘドを吐いた。腹の底から突き上げてくるものを、息を切らし、涙を流しながら吐いた。泡に包まれたものや、血の色をしたものを吐きながら、自分の体から力という力が萎え落ち、しまいには空気よりも軽くなつて、ふうわり漂い始めるのを感じていた。

そのとき天井の、それまでじつと壁にはりついていた蛇が、いきなり蒼黒く光る鎌首を立て、次の瞬間、その蛇の姿は、スウツとぼくの頭の中に消えていった。

国道を横切った。

あたりには、家らしい家はない。いま来た道の大きくカーブしたところに、はるかにガソリンスタンドが見えている。

どこかでウグイスが鳴いている。稚拙な鳴き声だ。

水を張った周囲の田圃では、蛙が激しく鳴いている。あまりに一斉に鳴きたてるため、まるで森閑とした静寂のうちにいるという錯覚に陥ってしまう。

国土地理院発行の二万五千分の一の地図を拡げた。等高線の密になつたところにポツンとある瑞光寺まで、約四キロとふむ。国道から県道に出て、さらに県道を離れて山道に入り、曲がりくねった道を歩かねばならない。

十分ほど歩いたところで県道と別れた。左に大きく折れた砂利道が、木立の奥に続いている。杉や桧や椎やカシの雑木が、鮮やかな緑を滴らせている。車一台がやっと通れるくらいの薄暗い道は、十日ばかり降り続いた雨に洗われ、ところどころに深い窪みが露出している。

急勾配になってきた。ゆっくり歩いてるのに、Tシャツの背中から尻にかけて、びっしり濡れてくる。傘とタオルと文庫本を四、五冊入れただけのショルダーバッグが、意外な重量を感じさせる。後ろを振り返ると、高い木々に遮られ、いま別れてきたばかりの県道は、もう視界に入らない。カシの葉の隙間に、単調に伸びる国道が、うっすら光っている。

バカバカしくなってきた。こんな山道の奥に、なにをしにやっってきたというのだ。もともと、今田みたいな案内者気取りの、なにかにつけ見栄をきろうというやつが目算など端からわかっている。

結論も、読めている。

すべてのものは、偶有に過ぎないのだ。すべてのものは、虚であり、無であり、空に移行するまでのつかの間の仮定でしかない。それは、歴史が証明している。それが、壁に向かって何時間、いや何年座ってみたって、どう変わるものでもあるまい。

胸が爆発しそうに苦しい。

ここまで来ると道は細くなり、膝をこすほどの雑草が伸びている。茨や茅草もおい茂っている。ときおり、気味の悪い動物の声にも似た鳥の鳴声があたりを裂く。

道を間違えたのではないか、と心細くなった。どう考えても、あの祐子や西村教授たちが、好んで来るようなところではない。彼女たちが、たとえ一歩足を踏み入れたとしても、怖じ気を覚え、すぐにひき返してしまうに違いない。それほど、あたりの空気は湿り、木々が覆い被さってくる。

何度目かの地図をとり出した。国道をT字に折れて、池の上手で県道と別れ、のぼりに向かうくねった細道に入る。やはり、この道より他にはない。

いまならまだ間に合う。いま下りてしまえば、まだ大学行きのバスに間に合うかもしれない。しかし、そのとき、ぼくの頭の中にすっきりとぐるを巻いてしまった蛇が、ぬめりを帯びた声で微かに囁いた。

「見栄っぱりで気取屋の今田は、祐子や明美や西村教授までおびき出してしまった」

それにしても、祐子たちはどうしたというのだろうか。午後一時に文系玄関に集合、というのだったから、ぼくよりは先の筈である。だとすると、ほんのいま、この道をのぼって行ったということになる。

ぼくより後ろなのだろうか。彼らの方が後ろだとすると、下りるわけにはいかない。このまま上に進むよりほかなくなってしまう。ぼくは再び意を決してのぼりにかかった。湿った草の葉が、一足

ごとにズボンにからまる。濡れて重くなったズツクの底が、肌にまつわりつきそうな音をたて、粘膜質の地虫を踏みつけたりする。足音に驚いたのか、ふいに背後で、バツタが翅音をけたてて飛翔した。ぼくはまるで、誰も訪うことのない、木下闇に閉ざされた墓地にでも彷徨い込んだのだという、憂鬱な気分に陥り始めた。

息を飲んだ。

雑木の切れ目の光の輪の中に出た途端、ぼくは空が直角に折れているのかと思った。

ふり仰いだ眼の前に、杉の古木を左右に配し、薨を青空に突き立てた僧堂があたりを圧している。桧色の梁、赤銅色の軒。まだ新装なったばかりと見える瑞光寺の真下に出たのである。そして、山門に横付けのまま止まっている赤いカローラ。高い石垣の下をめぐつて、ゆるやかに伸びている車道。

玄関横の八畳間に入っていくと、祐子と西村教授が頓狂な声をあげた。

「ほう、君が来るとはねえ」

西村教授が上座にいて、なおも不思議そうな顔をする。

「どうして、一人で黙って来たの」

「どうしてって」

理由はあるのだ。

「だって、五人までだったら、一緒に車で来たのに」

祐子が、唇を尖らせる。

「どちらの方からいらしたんですか」

新しく加わったぼくのために、茶をいれていた寺の奥さんが訊いた。

「宮田町で降りて」

「まあ、宮田町で。それで、タクシーはすぐにつかまりましたか」

「歩いて来たんです。地図を見ながら」

奥さんは、ぼくよりも祐子たちの方を見回した。あの道は、国道に直結する車道が出来てからというもの、農家の人たちが山仕事でときどき利用するぐらいで、この一年ばかりは殆ど通う人もないという。

「車道に入るんでしたら、二つ手前の停留所で降りないと駄目なんです。地図には出てないでしょうね、まだ」

「バスで来る人もあるかと思って、ちゃんと停留所のことまで調べていたのよ、ほら。だって幸田さん、来るなんていわないもん」

明美が、不服そうにメモを拡げて見せた。

「文系玄関前に集合ってことにしてたんだから、これは幸田のミス

だよな」

ふすまを開けて、今田が入って来た。縦縞の袴に、黒い衣を着ている。

「そうよ、はつきりしないからだわ。でも、邦彦さんらしいこともね」

祐子は、ジャージの膝を揺すって笑い出した。

ムツときた。しかし、ぼくにはぼくのやり方がある。大体、参禅会に車で乗りつける方がどうかしている。

「山道をのぼってくるってのもいいもんでしたよ」

「ほほう、幸田らしくない殊勝な台詞だな。汝の狭き門より入れつてやつだ。おっと、これは禅門には関係ない」

「いえ、私ども同じです。とても大切なことですよ。もっとも皆さん、ここでは宗派のことなどに、少しもこだわらなくていいのですよ。宗教以外のこともなんでも、自由に話されていいのです」

西村教授のことばを、奥さんがやんわり受けた。今田がいつかいつていたK大出の奥さんというのは、この人のことだろうか。脂気のない髪は後ろで束ねてゴムの輪で結び、膝の丸くなった茶色のズボンをはいている。顔は痩せて小さく、前歯の一本が半分ほど欠けている。今田は、和尚は檀家まわりで忙しく、参禅会の方は奥さんの方が熱心なんだといっていたが、そんな印象には遠い。

「わたしたち、子供が二人、よそ様からお預かりしている子が一人、それにお爺ちゃんお婆ちゃんでしょう。ついいけないとは思いますが、私も家事にかまけてしまつて、座るのを怠つてしまうのですよ。読みたい本もいくらもあるのですけど、ちつとも進まなくつて。だから、こうして皆さんが集まつて、いろいろお話を聞かしてくださるのがわたしの一番の勉強なんです」

「じゃ、こんなにしてわたしたちが押しかけてきても、それほどご迷惑じゃないと」

「そうです。ぼくなんかいつも奥さんから、来たい人はいつでも誰でも連れてらつしやいといわれているんです」

傍から、今田がいった。

「ええ、来たい方はどなたでも結構です。嫌になられた方は、他の方の迷惑にならないよう、黙つて去られればいいだけです」

「ずい分、厳しいことと伺いましたけれど」

いつもに似合わず、祐子がおずおずと訊いた。明美も、首を縮め、寒そうな目をしている。

「わたしたちに出来ることといえば、ただ座ることだけです。難しいといえれば難しいし、やさしいといえればこんなにやさしいことはありません」

「ただ座つとればいいのですか。この齢になって迂闊なことですが、

また棒切れでひっぱたかれるのかと怯えていましたよ」

西村教授のおどけた調子のことばにつられて、祐子と明美が胸を撫で下ろした。

「棒切れでひっぱたいたり、公案というものを与えて、それに対峙させるという方法もあるのです。でも、ここは違います。ただ、じつと座っているだけです。しかし、これが意外と大変なんです」

今田が、膝の上で軽く指を組む格好をしてみせた。ぼくは、今田のこの殊勝面がどうにも気に入らない。

「そのお、足が痛くはなりませんか」

今度は、明美が小さな声で訊いた。

奥さんは静かに微笑んで、

「何年座っても痛いものです。たまらないくらいですよ。でも、ずっと続けていると、その痛さが一種の緊張になって、快いとさえ思えるときもあります。要は、痛さにとらわれないことです。痛さは痛さとして、手放しにしたらよいと思います。どうしても我慢できないときは、足を崩してもいいんですよ」

と、こともなげに答える。明美は、わかったようなわからないような表情で、目を瞬かせている。

「今日はその、わたしたちだけで」

西村教授が、お茶をすすりながらいった。

「黒田さんや吉村さんはどうされます」

「吉村さんはいつも七時頃ですから。黒田さんは、確か当直とか」

「とすると、今日は殆どぼくたちだけということになりますね。あ、先生、今日は正式の参禅会じゃないんです。いわゆる、その来たい者だけが集まって、というやつですから」

今田はそういいながら立ち上がって、玄関の方を見やった。

「遅いですね、和尚」

奥さんは、この時を待ち構えていたのか、にわかには動作が厳しく締まってきた。背筋をしゃんと伸ばし、長い本堂の板の間を音をたてず、先頭に立って歩く。そして、座禅堂の入口で合掌したままぼくたちの入室を待った。

今田のあとに西村教授、そのあとに明美、祐子、それにぼくという順番で続いた。西村教授も明美も初めてにくせに、今田のするしぐさのとおりになつさと入室していく。祐子も、部屋に向かって軽く会釈をすると、そろりと左足を踏み入れた。

ぼくの心には、この場になって、いよいよ躊躇するものがある。このまま後ろも見ずに駆け出してしまいたい。

ちらっと奥さんの横顔を見た。これまでとは別人みたいに、表情のない顔をしている。よくお通夜の席で見かける、あの抑揚のない

顔だ。ぼくがそこにいることなど知らぬ気な、石にも似た顔だ。

興味がない、というわけではない。しかし、これは質のよくないセミナーの類ではないか、という思いが強い。

とにかくぼくは、今田たちがこれから始めようとするこの、入口までは確かに見届けた。

「いけね、もう始まってらあ」

「ミチ、急げ」

「にいちやん、待ってっついていってゐるのに」

ぼくが後ずさろうとして、殆ど腰を浮かしかけたときだった。本堂の板の間に小さな足音が乱れたかと思うと、坊主頭の中学生ぐらいの子を先頭に、四人の子供が走り込んで来た。最も若い女の子はまだ四、五歳ぐらいであろうか。日向の匂いを体いっぱい包み、息せききっている。

「深呼吸をして、並んで。ミチが一番前」

中学生の子が、遅れて来た女の子の手をとって、自分たちの先頭に立たせた。

「静かにね、そっと入るんだぞ」

女の子がピョンとお辞儀をすると、いわれたとおりに抜き足差し足で入っていく。背中を突き合っていたあとの三人も、同じしぐさで入っていく。

最後の一人を見送った奥さんは、ぼくに軽く会釈して、とうとう自分から先に入室してしまった。

ぼくには、くると背を向けたときのその奥さんの背中が、「嫌になつた方は、いつでも去られて結構なのです」といつているかのようで、思わず、後ろに従って入ってしまった。それは、自分でも不思議なくらい、体の方が勝手に動いてしまったのだった。

「背骨を伸ばし、首筋もぐんと伸ばします。顎を引いて、舌を上顎にしっかりとつけて口を結び、後頭部で天を突き上げるかたちになります。目は普通に開いて、少し視線を下に落とす程度です」

「そして、自然に呼吸する。この姿勢は、小さな人間的思いを投げ出すのに最も適した姿なんだ。思いが湧いてきても、それにとらわれないこと」

八畳の間で、奥さんと今田がかわるがわるの説明してくれたことばが、いくらかは耳に残っている。ぼくは、右隣の今田の格好を見ながら、足を組んで指を結んだ。芯のない綿入れの座布団が、なかなか尻になじまない。膝を揺すり、肩を振ってみた。

そのぼくの静座を待っていたのか、息を半分ほど吸いかけたところで鐘が鳴り始めた。不意打ちをくらった格好で、ぼくはあわてて吸い込んだばかりの息を吐き出し、そのまま呼吸を止めた。鐘は三

つ鳴った。三つ目の鐘が鳴り終った途端、それまでざわついていた部屋の空気が、いっぺんに鋭く張りつめた。

鐘の余韻が、頭の上を流れていくのがわかる。音というものは、小さな粒子の波であるというが、まさにその音は、いく分尾を震わせながら、サラサラ流れていく。

音は、ふと立ち止まり、やがてふつりと途切れた。どこかの向こう岸に一滴残らず落ち尽くした、という感じだった。

鐘の音の去ったあとには音はない。

と、思ったのもつかの間、今度は、これまでとは全く逆の方向からの音が、大音響に聞こえてきた。座禅堂の裏手を流れるらしい磧の水音が、突然あたりを揺るがせ、浮上してきた。

まるで、飛沫をあげて轟く大滝ほどのすさまじさだ。

屋根の上で鳴く雀の声だって、怪物じみている。一陣の風。その風に翻る楠の葉擦れの音などは、のぼりがはためくぐらいの迫力がある。

自分の吐く息の音にも驚かされる。自分自身が、共鳴箱の働きをしてしまうのだ。鼓動の音が、すぐ耳の傍で鳴る。ひよっとしたら、心の思いだつて伝染してしまうのかもしれない。

性根をすえた。こうなったら、じたばたしても始まらない。

実際、なんのことはない。足などちつとも痛くない。西村教授の間の抜けた講義を聴くより、何倍も楽だ。むしろ、あまりにも単純過ぎてもの足りない。

今田を見やる。まっすぐ壁に向かい、座っている。呼吸も涼し気に通っている。

しかし、自分とどう違うとも思えない。高校の頃から来ているというから、もう五年以上もの経験を積んだ筈の今田と、たったいま始めたばかりの自分と、たいしてなにも変わっていない。

今田の右隣の西村教授は、早くも一回目の足を組み替えた。吐く息の間隔が、忙しく伸びたり縮んだりする。痛みに耐えかねているのだろうか。

祐子の肩は、ときどき小刻みに揺れる。いく分、右肩の方に重心が片寄るとみえ、その傾きを修正するために、軽く首を左に振る。

いきなり、腹の底にめり込んでくる野太い音で、鐘が二つ鳴った。部屋の空気がどつと崩れた。一回目の止静が終わったのだ。

子供たちの、ウオーという声が起こる。奥さんが、その声を穏やかにたしなめている。

今田は肩を静かに揺すり、頭を軽く回している。西村教授は、立ち上がるうとして、あやうく前のめりに躓きそうになった。額には、ぬめりそうな脂汗を光らせている。明美も、泣き笑いの態で、台座

を下りようとする。

ぼくは、弾みをつけて立った。どこも、なんともない。この二倍でも、三倍の時間でもぶっ続けに座っていたって、なにごとでもない気がする。みんなの疲弊した表情が、憐れでならないくらいだ。ぼくたちは、一呼吸のうちに片足をもう一方の足長の半分だけ進めるといふ、恐ろしくゆっくりしたテンポで床を歩く。左の拳を胸の前に伏せておき、右の手でこれを上から覆い、両肘は拳と水平になるように張る。そして、のろのろと狭い方形の堂内を一周する。経品（きんひん）といつて、仏の歩む法だと、奥さんと今田が実演してみせたので、迷わない。

一呼吸に半足。一呼吸に、また半足。またまた一呼吸に、また半足。わずかに半足歩き、深く吸い、大きく吐く。

普通に歩けば二十歩足らずの堂内が、まるで果てしない原っぱだ。それにしても、無言のまま、ただ前の人物の背中だけを見て一列に歩くこの様は、仏に従容と従う姿というより、大時代的な演技の臭みを感じさせる。前の背中がのんびりしていて、思わず突っかかりそうになるときなど、吹き出しそうになってしまう。

再び、鐘が三つ鳴った。

目の前の障子を見詰めている。

庭の藤棚の青い蔓が、紙を透いて見える。勢いよく伸びた蔓の先端が、棚を離れ、首を振っている。それが、ときには大きく逸れ、山門横の鐘樓の瓦を薄緑色に掃いたりする。

蔓の向こうに、白い国道が北に向かって伸びている。暮れ始めた空の下には、県道も、曲がりくねった細い道も見える。藪の中を、息せき切つてのぼる自分の姿も見える。

急勾配を息を弾ませながらのぼってくるぼくの目は、鱗木の生え繁った雄大な大陸を見ている。燃える太陽の光の輪の中から、一匹のニクトサウルスが現われたかと思うと、河の上流に湧いているジリギクチス目がけ、いきなり急降下を始めた。

雲が流れている。日射しも遅々と移っていく。杉や桧や椎やカシの雑木の山が、鮮やかな淡緑色に輝き、次には濃青色に変化する。

ひよっとしたら、ぼくの心はすっかり研ぎ澄まされ、見える筈のないものまで見え始めたのかもしれない。障子という確かな障壁がありながら、この寺の庭の風景や、山の色や、暮色を帯びた空の色までありありと見える。

ただ座っているというだけで、ぼくにはなにもかもが手にとるほどに見える。

もしかしたら、行者が難行苦行の末に手に入れるという悟りとは、こんなにた易いものなのかもしれない。

そのときぼくは、背後に黒い影が立ち、骨ばった太い手が伸びてくるのに気付かなかった。

ふいに、その手がぼくの頭を揺すった。そして、両肩を思いきり後ろにねじ曲げた。背骨も、息が止まりそうなほどに引き上げられた。影は、無言だった。無言のまま、すさまじい重量で、のしかかっていた。

途端に、障子の色がただの煤けた紙の色に変わった。藤棚も消えた。鐘楼の屋根も、白い国道も、どこかに消しとんでしまった。

ねずみ色にくすんでしまった「ただの紙」には、樹の間を洩れてくる希薄な日が、ぼんやり影を落としているだけだ。

腋の下から、汗がどつと吹き出してきた。額からも、首筋からも湧いてくる。全身の毛穴という毛穴から、湯滴が玉となってせり上がってくる。

ぼくの体は、熱気球のそれだ。カツと燃えあがり、いまにも空中への離陸を始めようとしている。本体をつなぎとめていたボルトのねじが、いきなり荒々しく引き千切られてしまったのだ。

何時間も過ぎたと思った。とてつもない時間の堆積が、唸りをあげながら頭上を過ぎていった。

ぼくは、恐る恐る目を開いてみた。漠とした風景の中に、砂塵の余韻が残っている。まだいまもくすぶり続ける燃え殻から、うっすら白い煙がたちのぼっている。汗と煤にまみれ、口や鼻には夥しい砂粒を詰め込んだまま、ぼくはそこに倒れていた。

規則正しい今田の呼吸が聞こえてくる。静かに息を吸ったと思うと、しばらく止め、やがてゆるやかに吐く。吸う、止める、吐く、吸う、止める、吐く。ぼくは、自分の呼吸が今田の呼吸に比べて、異常に早いのに気付いた。今田が二回し終るうちに、自分は三回が終ってしまう。どうかすると、四回目に入ることだってある。

今度の時間は長い。一回目はあつという間に終わったのに、今度はばかに長い。確か、五十分と聞いた筈だ。一回目の経験というなら、もうとうに一時間はまわっているに違いない。鐘を打つことを忘れていたのではないだろうか。みんな、その間違いに気付いているくせに、知らんふりをして待っているのだ。

さきほどの黒い影は、和尚に違いない。和尚が遅れて入ってきたため、それまでの時間を帳消しにしたのだ。要するにぼくたちは、何十分かの時間を余分に座らされていることになる。

ぼくは、腹の前に組んだ腕をいく分ずらして、時計を覗いてみた。だが、ようやく針は三十分を越えたばかりのところを指している。

まだ三十分。もう一度覗いた。しかし、飴色の秒針は、間違いく銀白色の円上を確実に刻んでいく。

祐子の肩が、かなり傾いている。思いきり開いた腿のつけ根のあ

たりが、小刻みに震えている。Tシャツの胸が不規則に波をうつ。西村教授は、ときどき上体が揺れる。そして、そのまま前に倒れ込み、しばらくあやうい均衡を保っている。と思うと、ようやく思いついたという具合に元の姿勢に引き戻す。

あと、二十分ある。あと二十分も、このままの姿勢で座っていないければならない。

いったん「時間」が意識の中に入ったばくは、その時間というものが、とんでもない悪魔なのではないかと思えてきた。

朝、目覚まし時計と格闘しているときの二十分、酒を飲み歩くときの二十分など、あっけないほどあつという間に過ぎてしまう。それがいまは、岩となり動かない。まるで、機転のきかない「頑迷な学者」みたいに、筋を曲げない。

息が詰まってくる。膝の上に組んだ腕が急に重たくなった。入室する前に済ましたばかりなのに、尿意を催してきた。早さを増した鼓動が下腹のあたりで脈打ち、時折冷いやりした感じで、ペニスの先端にまで這いのぼってくる。

「幸田まで行くんじゃないだろうな。今田なんて、底が知れてるぜ。あんな見栄っばりの、唐変木の尻について行くくらいなら、はなから寝てた方がましだ」

といていた村上のことだが、ふと浮かんできた。

「産むと喋ってきかねえんだ。バカなやつだよ、女って」

村上は、一級下の教育学部の子と同棲している。あれからどうしたろう、と普段は思いやりもしないことが気にかかる。女の方は、結婚してくれなくてもいい、と喋っていた筈だ。いま頃は、その子と一緒に正門前のビリヤードにでも入っているかもしれない。あいつのことだから、またなにかうまい逃げ道を考えるに決まっている。

「山のお天気は変わり易いんですよ」

奥さんが、廊下の網戸を閉め、八畳の間に戻って来た。もうすっかり暮れている。夕方までは、初夏の日射しがまばゆいほど照りつけていたのに、夕食が終わった頃からどろりと雲が垂れ込めてきた。裏山を吹き渡る風の音にも、どことなく湿りが感じられる。

「これは、一雨きますね」

今田がライターを鳴らした。

祐子が八人分の湯呑にお茶を注いでいる。奥さんは、膝の上に女の子を抱き上げ、和尚の横に座った。

「ミチ、お前の歯見せてみい」

「うわっ、たまげた、真黒だい」

おかつぱ頭の子が口を開いて、三人の男の子に喉の奥まで見せている。

「また、キャンディ食ってる」

一番上の子が人差し指の先で、黄色い飴のひっかかっている女の子の歯をちよっと突いた。

「うん、お姉ちゃんにもらったよ」

女の子は屈託がない。

「またあ、夜中に痛いつて泣くぞ」

「いくら泣いても、お医者さん、遠いんだからな」

「いまはなんともないんだもん」

女の子は、不服そうに顔をしかめた。男の子たちが、「見ろ、見ろ」とはやしたてた。奥さんは、そんな女の子の頭を撫でながら、三人の男の子たちを目顔で制している。

「楽だったわ。最初、慣れないうちは、いったい五十分もつのかしらと心配だったのに、二回目するときなど、もう済んだのかって思った」

明美が弾んだ声でいった。

「いやあ、君には感心した。見かけによらんもんだねえ。ずっとこう、しゃんと背筋が伸びて、ちつとも揺れないじゃないか。ぼくなど、足が千切れそうなほど痛くってね。それでも、思ったよりは楽だった」

西村教授が、照れ臭そうに茶をすすった。「お見事でしたよ、皆さん。なかなかこうはいかんもんです。わたしが入っていったときには、ちゃんとやっつけちゃった。遅れて来るなどというはしたないことで、わたしの方が教えられる思いがしますなあ」

和尚が、剃りあげたばかりの頭をピシヤリと叩いた。色の黒い、大きな顔の真中に、愛嬌のある丸い目が笑っている。ぼくは、あの背中をぐいと引つ張り上げた黒い影の主が、この目の前の和尚と同一人物であるとは、まだ信じられない気がする。なにか強大な、牡牛みたいに猛々しい存在を想像していたのだが、この和尚の顔はあまりにも愛くるしい。

「あら、わたし、和尚さんが入っていらっしやったこと、ちつとも気付きませんでした」

「わたしも知りません。ただ、足が痛いばかりで」

祐子は、勝手慣れた様子で、台所との間を行ったり来たりする。

すると、和尚が入ってきたのを知っているのは、ぼくだけということになる。誰も、背後から矯正された者は、他にいないということになってしまう。

「おとうさんが来たの、知ってる」

女の子が舌足らずの声でいった。

「ほう、わかるか」

「だって、匂いでわかる。お線香の匂いにするんだもん」

「ふむ、だったら、お堂の中にもたくさんお線香焚いてるぞ」

「うん、それに煙草の匂い」

「あ、そうかそうか」

和尚は、衣の胸をはだけて豪快に笑った。厚い胸毛の奥には、汗の玉が吹きこぼれている。

「わたしもいま着いたばかりですが、こうして初めて座られた方たちの顔を見ると、本当に晴ればれとしてますね。ついつい、昔のことを思い出しますよ」

夕食のとき、「吉村」と紹介された男が、隅の方から眼鏡の顔を出した。この町の農協に勤めているとかで、瑞光寺に足を運びだして十年以上になるという。まだ、三十代の若さだ。

「皆さんの顔を見てみると、座禅というのはただ長く続けてさえいればいい、というのじゃないということがよくわかります」

「わたしなぞも、その資格がありますかな」

「ええ、そりゃあもう十分です。ここにおいでになったということ自体、なにかの縁でしょう」

「そういわれると恥ずかしい話だが、わたしの学門には神も仏も登場しませんでね。いえね、わたしは歴史をやっている教師のはしくれですが、そもそも神や仏に最も近い分野にいる人間のくせに、いまが最後まで毛ほども思い至りませんでした。しかし、なんですか、人間の究極は人間ではない。そう思い知らされましたなあ」

西村教授が、いやにもののがわかったふうな方をする。ぼくには、教授のこの豹変ぶりがどうにも信じられない。山を下りたら、いまのことばなど、ケロリと忘れてしまいうに違いない。いつもの教授の持論からしてみても、これぐらいのことで変質するような代物ではないことはわかつてる。

「紆余曲折は人の常です。信じられんものは己れです。己れほどやっかいなものはありませんな。どれ、救うてやろうと、仏が手を差し伸べておられる先からひよいと逃げてしまふ。例えは悪いが、千円やろうというのに、十円しかいらんと、イヤイヤをしてるんですからな」

「座禅というのは、仏と同じ命を生きているという姿なのですね。始めもなければ終りもないいまの命を、仏と一緒に命を、わたしも生きていますという証しなのですよね」

「ハハハ、家内のいうことは難しゅうて、わたしにもようわからん。わたしは難しいことはなにもいわんと、ただ座るだけにしとります。また、座るだけしか能がないんですよ」

和尚が、よく光る頭を太い指でポリポリ搔いた。

「いま、奥さんがいわれました、始めもなければ終りもない命とは、どういうことですか」

ややあつて、ぼくは口をはさんだ。ぼくの本題に触れることばにやつと出会った、と思った。満を持していた、といつてもよい。始めもなく、終りもないなどというバカな話があるわけがない。

「それは、不生不滅、不増不減などという生滅を超えた存在のこと、をいつているのです。そして仏は、生滅を超えた存在そのものであるのです。わたしたちには、なかなか理解し難いことなわけですけれど」

「生滅を超えた。それはどのように証明するのです」

「信じて座る、それが証明なのです。ただ座る。そして、自分が仏と一体であることを感ずることです」

それみろ、とぼくは思った。宗教家はことばに窮すると、すぐに信じれば足るといふ。信じられないから、なんとか説明してくれとぼくらは頼んでゐるのに、ただ信じろといわれても、なにをどう信じていいかわからない。

第一、この世に気の遠くなるほど広大な宇宙があつて、その中のちっぽけな星にぼくらは住んでゐる。そのぼくたちは、何十億年という無生物の時代や、一億数千万年の恐竜の時代などを経て、ひよんなことでの世に生まれてきた。おまけに、日本という島国の、昭和という時期に、父が誰、母が誰、兄や弟や妹が誰という複雑極まる確率の中に生まれ、平成などといういまの世に生きてゐる。ぼくたちの前には、夥しい「なんとかザウルス」や、北京原人や、耶馬台国などが累々と死に絶え、広大無辺の宇宙にだって寿命がある、というではないか。

ぼくは、この方程式の中に入り込むとき、決まっていよいよのないういじんまに陥つてしまう。足元を踏みしめることが出来ず、無限の時空を、ただひたすら墜ちていくよりほかなくなる。とどまるどころもない。それなのに、墜ちていく筈の己れの影もなければ、闇も、底も、時空さえもない。

「信じて座る。ただ、それだけです。そんなことを信じよというのですか」

ぼくのことばには棘がある。

「どんな規則も生み出しながら、すべての規則を超えている、というのが命の実体なのです。つまり、宇宙も、わたしたちも、みんなが一つにつながった命を生きているのです。その同じ命の中にあつて、それらを超えた存在として、また、自らを超えた存在としてあるのが仏なのです。証明するとかしないとかいうことは、あまり意味のないことかと思ひます。現に、わたしたち自身が、一本の糸につながれてゐるといふことを知れば済むことですから」

奥さんは、落ち着いてゐる。女の子の頭を撫でながら、真直ぐにぼくの目を見て静かに話す。

「奥さんのいわれることもわかります。そこで、百歩譲って、ぼくが奥さんのことばを信じたとしましょう。だとしても、もう一つ疑問は残ります。その、仏自身は死なないのか、ということですよ」

「不生不滅のそのものなのですから」

奥さんは、「まあ」という表情のまましばらく口をつぐんでいたが、珍しくことばを荒げ、断定した。いい終ったあと、キュツと口元をひき結んでいる。

すっかり奥さんを怒らせてしまったらしい。いくらか後悔に似たとまどいが、胸をよぎっていく。

でも、まだ疑問は残る。生まれもしないものがどうして最初から在るのでしょうか。ぼくたちは、同じ命の糸につながったもの同士というのなら、どうして牛や豚や、米を殺して食わないと生きられないのですか。

「あの、ごめんなさい。わたしがこんなこと答えたって、しかたがないんですものね」

奥さんは、ふっと溜息をついた。膝の上の女の子が、テーブルの最中をねだっている。

男の子たちはつまらなくなったのか、二階の勉強部屋に行くといつて出ていった。

「ああ、それだが、答えになるかどうかしらんが、わたしが答えよう。とにかく、われわれ衆生や木石が限りあるものであることは間違いない。そこでだが、この世の中でのわれわれは、単なる一面の生き方をしかしていないと、わたしは思っている。これが最初であり、最後であるなどというのではないのだ。以前にもわれわれは在った。以後にも在る。と、こう考えておる。もちろん、死ぬることには違いない。しかしだな、そいつは一面でしかないわれわれがくたばったに過ぎないということであって、奥の深いところではどっこい生きているのだ。ほら、庭の銀杏が良い例だ。いま、びっしりと繁っている葉っぱがわれわれだ。この葉っぱどもが、去年の葉っぱのことを知っているかな。来年や再来年のことを知っているかな」

ここまでいって、和尚は女の子の手に最中を握らせ、自分も一口に放り込んだ。

「実は、去年もわれわれは葉っぱじゃった。来年も、再来年も葉っぱであるわけなのだ。いやいや、枝のはしくれであるかもしれない。しかし、銀杏の大木は、いつのときも亭々と生きている。雨が降ろうと、風が吹こうと、同じ一つの命を変わず、な」

それでは答えにならない。なんで、葉っぱの一枚一枚と根幹とを一緒にするのだ。まして、葉っぱの一枚が自分であるとするなら、秋の日に舞い落ちてしまったら、それでおしまいではないか。根幹だって、いつか枯木として朽ち果てていく日があるのは目に見えて

いる。

「こいつは、わたしも少し混乱してきた。まずい例えだったかな。キリストなどは、一粒の麦落ちて死なずば、というている。つまり、永遠の命を生きたためには、この肉の存在が死なねばならぬこと。あなたのいう、無だか空だか知らんが、そいつに落ちてみんことには、なにも始まらんと。わたしは単純だから、どこにどう転げ落ちようが、生きようが死のうがどうでもよいと思っっている。

わたしは、信ぜよとかいう押し付けがましいことはよいわん。ただ、座るだけしかないと思っっている。なるようにしかならんと、己れをおっぼり出しておるんだ」

和尚は、傍の大団扇をつかった。一台しかない扇風機の風が、横から生ぬるい風を送ってくる。

正座の膝を崩さず、黙ってたばこを吸っていた今田が、ゆっくり顔を上げた。

「確かに宗教家はすぐに信ぜよといひます。これはぼくたちにとつて、すごく安易に映る場合があります。信ぜよといわれても、簡単にはいきません。ぼくたちには分別というものが先にたつて、とかく理屈をつけたがりです。どうしようもない窮地に追い込まれたときでさえ、理屈はなかなか筋を通してくれません。信じるという入口を突き抜けることはやはり難しいことです。吉村さんみたいな人を見ていてさえ、そう思います」

自分の名前を呼ばれた吉村は、あわてて眼鏡の縁を指で押し上げ、わたしのような者のことなど、お話しする値打ちもありません、と手を振りながら後ろに退がった。そうして壁際まで退がると、膝をずらした格好のまま俯いてしまった。が、しばらく経って、

「ただ、幼いときに母を亡くしましてね」と、小さく呟いた。

「それから、お父さんも亡くされた」

「母が死んだのが七歳のとき、父のときは小学六年でした。三つ下の妹もおりました」

俯いたまま、吉村はポツリポツリとことばを拾い始めた。

「母が死んでからというもの、父は昼間から酒を飲んで、ギャンブルに溺れるようになりました。母が死んだというこの意味もよくわからないわたしたちは、電灯もつかない部屋で、毎日腹を空かして泣いていました。悲しくて淋しくて、わたしは何度母を探しに、妹と二人で、夜のバス停に立ったかしれません。街まで干物を売りに行った母が、いまにもひよっこり帰ってくるのではないかと思っただのです。

そのうち父は、化粧の派手な女を連れてくるようになりました。

酔ってふらふらになった二人が」

吉村は、眼鏡をはずして、指先でガラスの玉をこすった。痩せた

喉仏のあたりには、剃り残された顎髭が一本、ひよろりと伸びている。

「父は、漁に出たまま帰らなかったのです。わたしは伯父夫婦の家に、妹は叔母夫婦のところ、それぞれひきとられました。いま思えば、決して不幸ではなかったのですね。」

でも、わたしは父を恨みました。学校にも殆ど行かず、チンピラまがいのことをするようになりました。酒もおぼえて、いつか同じ中学の子と、関係までできてしまったのです。父への復讐、そうです。それは、父がわたしたちにしたと同じことを、全く同じようにすることだったのです。

ある日、わたしは兄貴分からこっぴどく殴られました。組の金をちよろまかしているというのです。わたしには身に覚えのないことです。もつとも、そんな言訳など通用するところではありません。腕も上がらず、目もふさがつてしまうほどに殴られたわたしは、アパートに戻って、実はとうに伯父夫婦の家をとび出して、一DKのアパートに転がり込んでいたのです。女の子の顔を力まかせにひっぱたきました。なぜだかわからないけど、そうせずにはいられなかったのです。涙が止めようもなく零れるのです。

こんなこと、どうでもよい話ですね。でも、そのときわたしは、父は泣いていたのではなかったか、と思っただけです」

吉村は、テーブルの脚のあたりをしきりに撫でている。青白い頬が骨の形に突き出し、こわばっている。

西村教授は腕組みをして、口をひき結んでいる。祐子は、膝の上にかかえた茶碗の中を見詰めたまま、動かない。

「だから、わたしには理屈のいいようがないのです。父がわたしの中に生きている、ただそう感じただけなのです。こんな考えは、あるいは間違っているかもしれませんが」

「ぼくは、吉村さんのお話を聞くたびに、まず謙虚であれ、と思うのです。どこまで行っても、われわれの能力には限界がある。それは、はっきり証明がなされています。犬の耳には聞こえるものが、人間の耳には聞こえないというではありませんか。頭の毛一本生やそうたって、どうにもならないではありませんか」

今田が少し鼻にかかった声で、勢い込んでいった。
だから信じれば足る、といたいのであろうが、そこには飛躍がある、とぼくは思っている。限界がある、完璧ではないぼくら人間がある存在が、限界のない存在に仮に乗ったとしても、いつか振るい落とされてしまうのがおちであるう。

このとき、また、あのぼくの頭の中の蛇が、光る腹をくねらせ、よじらせながら、にわかにならぬらとうごめき始めた。

「なるほど、これは脳細胞の入れ替えをせにゃならんらしい。なに、わたしもちようど潮時と思うとりました。こんなにくたびれた脳ミソなど、犬にでも食わせてしまわねばならん。おっと、犬にでも、なんて、これはタブーでしたな」

西村教授は、どこまでも調子がよい。

「その中学の女の方、いまはどうなさっているのですか」

明美が思い詰めた表情で、テーブルににじり寄った。

「いまの妻です。それから八年ばかり別れていたのですが、大阪の水商売で失敗して帰ってきたところにひよっこり会って」

明美の瞳に、思わず喜悦の色が浮かんだ。

「奥さんは、子供が産めない体になっていらっしやるんですね」

今田がまた余計なことをいう、とぼくは今田を睨み付けた。

九時から二時間の止静は、たまらないほど苦痛だった。鐘が三つ鳴り終えた途端に、すでに戦意をなくしてしまった。それでも足を組み、指を印に結び、背筋を伸ばした。そして、鼻から腹へ、腹から鼻へと呼吸を通わせる。

なんで、こんな大仰な格好をしなければならぬのか。本当に仏というものがあるのなら、ほんの数秒でも身を投げ出してしまえばいい。わかってもええよというものではないか。それとも、仏という方は意地の悪い方で、五時間以上座ればAで、それ以下はBなどというエンマ帳を書き付けているのだろうか。

同じ仏でも念仏になると、「ナムアマミダブツ」と唱え終るか終わらないうちに、大無量寿仏が救いに現われるという。だとすると、この禅の仏と、念仏の仏とは全く別の方なのだろうか。念仏の仏は慈悲にあふれた温厚な大人の風貌で、禅の仏は苦悩に満ちたかなり理屈っぽい方で、などと考えているうちに、和尚の手がまたいきなり背中に伸びてきた。

祐子が、下宿のぼくの部屋にいる。もう終バスだけしかないというのに、立とうという気配はない。コップには、半分以上の水割りが残っている。

「君の部屋、まだ無理だね。バルサンは、そう簡単には消えないよ」

祐子は夕方、消毒をしているので部屋に入れない、といってぼくの下宿にやってきた。カフカを返すついででもあったからちようどよかった、とケラケラ笑って、そのまま座り込んでいた。

ぼくには魂胆がある。手を伸ばせばすぐ届きそうな近くに、祐子の胸がある。膝をずらすたびに、やわらかい腿に触れる。

「そうね、困ったわ」

「いたらいよ、ここに」

「ここに。なにか、下心があるんでしよう」

祐子は、薄く染まった目元で、いたずらっぽく笑っている。今夜の祐子は、とにかくよく笑う。

「違う、違うよ。ただね、君が帰れないんならここにいたっていいっていつてるだけさ。ぼくは、村上のところにも転がり込むからさ」

「村上さんのところ。まさか、彼女がいるのよ」

「だったら、石井のところにも」

ぼくはあわてて石井の名前をもちだした。喉の奥がカラカラに渴いて、自分のことばがどこかひきつっているのがわかる。ぼくの心臓は、いまにも張り裂けてしまい、そうに高鳴っている。「いまだ」と、初めて祐子の肩を抱く瞬間のことを思っ、体を硬くこわばらせている。

ぼくはまだ、女の体を知らない。テレビや写真では、何度も際どい場面を見ているし、医学部の友人からは専門書を借りて読んだこともある。深夜、ふと隣の部屋から洩れてくるすすり泣きみたいな声に目覚め、吹き上がってくる自分の欲情を始末したこともある。それなのに、間近に祐子の息遣いと重量を感じると、自分の体が消しとんでしまい、そうなおのきを覚え、萎縮してしまう。

「わたしの背中には大きな黒子があるのよ」

祐子が、頬杖をついたままでいった。

「いよいよぼくは、『男らしく』最後の決心をしなければならぬ。

「ポンと体を投げ出してしまえば、あとはなんとかなるのさ」と、割れ落ちそうな声で、激しく熱い息を吐き始めた蛇が、耳の傍まで下りてきて叫んでいる。

「ここから覗いてみて」

祐子はブラウスのボタンを一つはずした。

「いまだ」

わけのわからないことばを発すると、ぼくは祐子の肩に猛然と覆い被さっていった。

と、思ったぼくの指は空を泳いで、ボトルをわしづかみにしていた。トボトボと、粘っこい液体をコップに注ぐ。祐子のコップにも注いでやる。殆ど溶けてしまった水を、氷皿の水の中からつまんで、二人のコップに落とす。

ぼくは、全く意味をなさない作業を、黙々と続けた。そうでもしていないと、垂れ込めてきた重苦しさに、圧しつぶされてしまいそうになってくる。

「ねえ」

熱い息が、ぼくの首筋にねっとりからみついてきた。

「そんな」

ぼくのことばは、いつぺんに宙に弾けとんだ。ぼくの手は、ものすごい早さで祐子を押し広げ、熱く燃えさかる火口の中に突進していった。

ぼくは、激しくと乱れている自分の呼吸で我に返った。

室内灯から放たれる薄暗い光が、ぼくの影をぼんやり障子に映し出している。その影が障子の細い棧に折れ、いびつな闇の色を結ぶかと思えば、次の瞬間には灰白色に際限もなく拡散してしまう。

ぼくが揺れている。いや、ぼくの心象の中のぼくの影が、揺れ動いて止まない。

ぼくの心の芯には、まだいまのみだらな想いの余韻が、糸を引き渦巻いている。喉の奥には、熱くただれて乾いたあとのしこりがある。印を結んだ指には、ぬるりとした祐子の肌の感触が生温かく残っている。

どこかで、虫が鳴いている。情欲の火を吹きそそり、淵の底にまで誘い閉じ込めていきそうな鳴き方である。

祐子を見やった。少しばかり右肩が落ちている。右肘も、こころもち硬く縮んでいる。しかし、鼻腔を通じる呼吸は、ものさしで計ったみたい規則正しい。

ぼくは、はつきりと祐子にも見える角度まで体を開いた。和尚の手が伸びてこないように、せいっぱい背筋を伸ばし、肘を張った。

ぼくは目を凝らした。祐子の膝が、小刻みに震え始める筈だ。シヤツの胸元が、ふいにあえぎ始める筈だ。しまいには、体を投げ出し、泣き崩れてしまうかもしれない。なぜなら、祐子は、まぎれもなくいまのまま、ぼくの共犯者であった筈なのだから。

だが、ぼくの試みは徒労に終わった。祐子は、ぼくがここにいることさえ知らぬ気に、一点に目を止め遠くを見詰めている。臉も動かなければ、瞳も動かない。唇には、いく分丸みのある鼻梁の影が、淡い隈を投じている。白い首筋には、豊かにカールされた髪の一部が、小さな砂嘴のかたちにかかっている。

一週目の西村ゼミを休んだ。ゼミどころか、山を下りてからというものは、下宿から一步も出ていない。

ぼんやりノートをひろげては、「なんとかザウルス」の詩を書こうと思っている。霧の色に似た詩の気分が、ようやくぼくをまとい始めようとはしているのだが、ちっとも焦点が絞れない。

へいきなり空が裂け、おどろおどろしい声が「去れ」ともの憂げに囁いたかと思うと、五十トンもある臨月のネメグトサウルスは、そのまま、前脚を二つに折ったそのままの姿勢で、化石した。

ここまで書いて、あとが進まない。もう、三日も同じ字面を眺め

ている。

ぼくの周囲には、インスタントラーメンの空き袋が、いくつも転がっている。最初のうちはポットの湯をかけて食べていたのに、だんだん面倒臭くなって、生のままかじりだした。とっておきのポトルは、わずかに二ミリぐらいを残すだけで、振ればたよりのないかな音をたてる。

西村教授や、祐子に会いたくないのだ。山を下りるときには、しかたなく今田のカローラに便乗したのだったが、西村教授は「もう一度是非来たい。できたら、ゼミのみんなで来たいもんだ」などといい出す始末で、すっかり閉口してしまった。祐子は祐子で、明美と二人で、まるでピクニックから帰るみたいにはしやぎ、「やつぱり街が一番ね」と、着いたら真先にピザを食べに行く約束を交わしていた。

これだから、西村ゼミはくだらない。もう今年の単位なんかどうでもいいから、こんりんざい西村教授たちの顔など見たくない、と思ってしまう。

ぼくは、ぼんやりしていると遠くかすんでしまう頭をガンガン叩きながら、やっと続きらしいものが浮かんできた支離滅裂なことばを、ノートに刻み始めた。

へ一億年もの風雪に耐え抜いた巨大な議事堂の苔むした議場では、首相のチンタオザウルスの長老が、いかめしい角をそびやかし、降り注ぐライトの中を、ゆつくりと演壇に歩み寄った。「見よ、われわれの上に戦禍の時代が過ぎて久しい。われわれ民族は、英知と、博愛と、血のにじむ努力とによって、永久の平和を確立した。〃神の姿に最も近い〃われわれの前途には、果てしない永劫の未来が約束されている」首相は、やおらこぶしを天に振り上げ、カメラのフラッシュが燦然と焚かれる瞬間に身構えた。燦然と、燦然と、その地鳴りのような瞬間が焚かれた。

ぼくは、書いているうちに、耳の奥の方から起こってくる底知れない目まいを感じ、机の上に突っ伏した。部屋が回り始めたのだ。ゆるやかに、そして鋭い音をけたてて、部屋が回っていく。「〃神の姿に最も近い〃なんてことは陳腐なことばさ」と、耳元でヒューヒュー鳴る蛇のだみ声も混じっている。

「幸田、おい幸田」

誰かがぼくの背中を叩いている。

「おい、まさか死んじやいるまいな」

ぼくは、スローモーションみたいに振り返った。村上が立っている。

「なんだ、お前生きていたのか」

生きていたかはないだろう。

「祐子に聞いたらな、お前がずっと顔を見せないというんで、ちょっと期待して来てみたわけだ。しかし、この部屋の臭いはなんだ。このくそ暑いのに、窓は閉めきつてさ。黴に食われて、それこそ死んでしまうぞ」

「いらぬお世話だ」

と、いおうとしてやめた。間近に人の声を聞いたのは何日ぶりだろう。

「ほら、彼女からの差し入れだ。それにことづてもある。＼なんとかザウルス」の詩が完成したら、できるだけ早くお出かけくださいまし、だとさ」

村上は、スーパールの袋を机の上に放り投げた。

「それに、もう一つ報告だ。明美たち、不穏な行動を始めたぞ。『東洋の神秘。禅の歴史的探求』なんてテーマをでっちあげ、今田が教組みたいな面をして、椅子禅なんてものを始めたのだ。三十分も、阿呆みたいに黙って座っている。もつとも、ツネプロの方はてんで渋い顔をしてやがる。俺はふてくされて盗み見してたんだ。そうしたらツネプロのやつ、情けなさそうな目をして、机の上の例の虫の食った本をあちこちめくったりする」

「それがなんだ」

「これでおしまいだ。帰るぜ」

「ま、待て、急ぐなよ。どこに行く」

「俺か、俺だって用事はいくらもあらあ。こう見えても、ご多忙なんだ、俺様は」

「で、どうなった」

「どうなった」

「教育学部の」

「ああ、あいつのことか。俺あ知らねえよ」

村上は、手荒にドアを閉めて出て行った。あとに、柑橘系のオーデコロンの匂いが残った。

ぼくは、そのまま仰向けに畳の上にひっくり返った。腹の皮が背中にまつわりつきそうなほど空腹なのに、村上の残していった匂いが鋭く胃の腑にさしこんできて、祐子のくれた袋を覗いてみる気にもなれない。

ぼくは、隣のアパートの壁の照り返しを受けて、ほんのり明るい天井の節目を、見るともなしに目で追った。節目は、一枚の板に必ず二、三個ずつあって、とりわけ大きい節目が、ちようどあの瑞光寺へののぼり口で見た地図のように、年輪の過密に寄ったところにポツンと一つはめ込まれている。その節目からは、煤けた細かいクモの糸が垂れていて、どこからか通ってくる風の通り道にでもあたる

のか、かすかに揺らめいている。

講義を終えた学生たちが、大講義室を出始めた。「半チャンドウだ」と、パイを積む真似をする者がいる。バイクのヘルメットを被って出てくる者もいる。ミニスカートの子もいる。しかし、どの顔もみな一様に眠たそうな表情をしている。

渡り廊下の柱の陰で、ぼくは祐子を待っている。必須の「原論」だから、祐子が彼らのうちにいることは間違いない。こうして見ていると同じ学部と同じ学年の連中なのに、ずい分知らない顔がいるのに驚かされる。四、五人が一塊になって出てきたあと、しばらく間があいて、二人が出てきた。それが最後だった。

祐子が原論を休むことは、殆どない。祐子の時間割では、原論のあとは本館二階の西村ゼミに向かうことになっている。であるのなら、この渡り廊下を必ず通る筈だ。

ぼくは、外に向かつて開け放たれたままの講義室を覗き込んでみて、誰も残っていないのを確かめると、もうどこにも行くあてがないのに気付いた。ノートもテキストもない。昼過ぎに起き、ふと祐子のことを思い出して出て来たのだ。

ポケットを探ってみた。数枚の硬貨が指に触れる。

百年にもなろうかと思われるカイズカイブキが、異様な影を落としている砂利道を歩き、通用門わきの購買部に入った。購買部には、書籍や日用品が貧弱に並べられた店舗の他に、テーブルが五つだけの小さな喫茶室がある。安いだけが取得のコーヒート、インスタントの紅茶と、それにトーストぐらいしか置いていないコーナーのくせに、名前だけは「ラウンジ」などとしやれている。

学生たちは、味にはうるさいので、このラウンジに寄る者などあまりいないのだが、ちやうど三時限目の退けどきとも重なったためか、五、六人の先客がいる。

ぼくは、テーブルに空きがないので、しかたなく壁に立てかけられたパイプ椅子を広げて腰を下ろした。高校を出たばかりという年齢好の、額の狭い店員にアイスコーヒートを注文すると、返事もせずに鼻歌を歌っている。音響のよくないスピーカーから低く流れてくるロック調の曲に合わせて、カウンターを叩きながら歌っている。ときどき拍子の狂う中指がカウンターを叩くたびに、「米軍基地撤去」というプレートが、紺地のシャツの胸で揺れ踊る。購買部職員は無愛想はいまに始まったことではないが、彼女はそれこそニコリともしない。ニコリともせず、一方の指で灰の部分が長くなったたばこを口元に運ぶ。

彼女を見てみると、「このキャンパスは、凄かったんだぜ」と村上がいつていたことばが、いくらかはわかる気がする。「門にも、教室

にも、学部長室にも、それに購買部にもだ。めぼしいところにはいたるところにバリケードを築いてさ、そこに何か月も寝泊まりしてたんだ。どういうことだかわかるか。やり放題、し放題というわけだ。おまけに、学生でもなんでもない女まで引きずり込んできてよ。機動隊に追われて逃げたやつらが残したものは、アジビラでもない、ヘルメットでもない、山をなすゴム製品だったという」

村上はどこから仕入れてくるのか、こういうネタには詳しい。もちろん、好き者の村上のいうことだから、かなりの誇張が含まれていることは、ある程度割り引いて考える必要がある。

それにしても、このキャンパスのどこに、そんなエネルギーがひそんでいたのだったろう。いまのぼくらの仲間には、教授にノートを突きつける者などいやしない。みんな、半分はなんとなくわかって、あとの半分はなんとなくわからないまま、じっと時間の過ぎ去るのを待っている。突然、発作的に騒いだかと思うと、次の瞬間にはケロリと忘れてしまっている。そのくせ、講義中に居眠りさえろくにできない。

―赤黒色の旗竿をかざし、白や赤や青のヘルメットが、大講堂の前を渦巻いてくる。鋭い笛が、あたりの夕闇を切り裂く。激しいシチュプレヒコールが湧き起こる。怒号がとび交う。ガラスが叩き割られる。投光機を発射したいだいだい色の光が、夜空に躍り上がり、屈曲し、絡まり合う。催涙弾が続けざまに放たれる。悲鳴が上がる。紫煙がもうもうとたちこめる。

ぼくは、四、五年前、テレビの特集で見たこのキャンパスの光景を思い出す度に、中世代の巨大な恐竜が、突然薄闇についてせり上がってくるのではないかという恐怖を覚えるのである。

「あら、やっぱり来てたのね」

祐子がぼくの背中を軽く叩いた。いつの間に入って来たのだろう。祐子には似合わない、猫みたいな素早さだ。

「いやに浮かない顔で、黙然と座っているじゃない。どうしたのよ」
祐子の声は明るい。どうしたのよ、なんて急に切り込まれても、ぼくの沈んだリズムから、祐子のリズムに切り替えるのは容易ではない。

「明美が教えてくれたのよ。邦彦さんが購買部に入っていくのを見たつて。ちようど、コートに出ようとしてたところよ」

祐子は、「アイスティー」といって、抱えていたラケットと、大きな紙袋を傍のテーブルの隅に下ろした。ロックの店員が、あからさまに不愉快な表情をみせる。祐子の方は、気にもならないらしく、パイプ椅子を壁からはがし、ぼくの膝近くに座った。かすかな汗の匂いが鼻先をかすめる。

「ゼミは」

「ゼミね、今日は休講。ツネプロのやつ、とうとう熱を出したのよ。この暑いさかりに、二、三日前からグスグスやってたわ。それをね、山のせいだっていうんだから」

西村教授らしいことだと、ぼくは口に含んだばかりのコーヒーをあやうく吹き出しそうになった。

「あいつ、山を下りるときまではえらく威勢のいい口ぶりだったくせに、あれからからつきし駄目なのね。突如、一方的に通告してきたのよ。ゼミのテーマは、やっぱり『近世労働史』にするって。君たち学生は、いまは知識の吸収に努めるべし。なによりも、客観的論理性の涵養を第一にすべしってね。その理由がふるってると思わない。古くさいんだなあ」

祐子は、抑揚をつけてしゃべりだした。小柄な割に豊かな胸には、木彫りのアイヌ人形が下がっている。薄く小さな唇には、うつすら紅を引いている。

「今田さんたら、ちっとも怒らないの。時期がくれば、ツネプロもわかってくれるって。明美なんか、唾でもひっかけたいって口惜しがってるのに。だってね、せつかく徹夜までして資料を作ったんじゃない、ほら、これ」

祐子は、テーブルの紙袋を指さした。

「やる気がないんならないと、最初からはつきりいうべきよ。生返事をしていい加減にひき伸ばしているからへんなことになるのよ。男らしくないのよね、ほんとに」

「今田はすんなり諦めたの」

「一回や二回でうまくいく方が間違ってるって、こちらは悟りきってるんだから。今田さん、ものわかりがよすぎて、ときどきたままないときがある。ちっとも、怒った顔見せないのよ」

「村上たちが、ツネプロをそそのかしたとか」

「それはないと思うわ。村上さん、自分のことではいっばいで、どっちだってあの人関係ないのよ。教育学部の子と別れて、今度は、薬学部の子と一緒になるというじゃない」

祐子は眉をひそめた。以前には、祐子も誘われたと聞いたことがある。しかしぼくは、村上にはなにか人を酔わせずにはいない、崩れた媚薬みたいな魅力があると思っっている。

「石井さんも駄目。単位さえもらえば、なにゼミだっていいっていうくち。でも、ツネプロの無節操さには劣るわ。なんてったって、癌はツネプロ」

数少ないゼミの女の子に、こんなにまでいわれるとは、西村教授も落ちたものだど、ぼくはむしろ同情したくなってきた。

ひよっとしたら、教授は教授なりの筋を通しているつもりなのか

もしれない。衆愚の声は声として、一応は尊重してみせるといふ、彼なりの方法で。

もともと、この齡までかかって「科学的階級論」で固めた頭が、たった一回の座禅の経験ぐらいで揺らぐということの方が、どうかしている。熱を出したというのも、自分でアドバルーンを打ち上げてはみたものの、引っ込みがつかなくなってしまった挙句の、アレルギー反応の表れなのかもしれない。

「あいつ、この大学ではかなりの顔でしょ。マスコミにも結構受けてるし。しかし、実体は違うのよね。小心でへ理屈屋の、要領が正しいだけの男なのよね」

狭い部屋の熱気で汗ばんでくるのか、祐子は何度も首筋をハンカチで押さえる。

「それに」

「まだなにか」

「邦彦さんだって、なにを考えてるかわかりやしない。あなたが、最初から乗り気じゃなかったことは、わかってる。でも、ちゃんと山にも来たんじゃない。それなのに、あれっきりゼミにも姿を現わさないし」

「ぼくは、君たちみたいなのもりで行ったんじゃないんだ」

「わたしたちみたいなのもりって。わたしたちに、一体なんのつもりがあるというの。なんにもわからないから行ったんじゃない」

「そのお、つまり、君たちの場合、読めてるんだ、最初から。東洋の神秘、現代の奇跡」

「ちっともわかりやしない。すぐにごまかしてしまうんだから。意見があったら、はっきりいうべきよ」

「結局、空に帰すってやつだ。」なんとかザウルス“みたいに、ぼくらだって”

「またその話なの。あなたの感傷には、付き合ってもらえないわ。わたしたちは、もう少しは冷静に自分を見詰めようとしているのよ。どこから来たのか。なんなのかって。これ、わたしたちの、本当に切羽つまった問題として、なのよ」

「だから、そのまるで『冷静な』今田たちと結託して」

「まあ、ツネプロみたいなのこといい出すんだから」

祐子は、まじまじとぼくの顔を見詰めた。

「違うよ、だから、君は今田たちと一緒にあって、その、また、山にも行こうというわけだ」

「当然じゃない。そのために、苦労してたくさん資料も作ったのよ。それを、ツネプロやあなたときたら、平気で後ろ足で砂をかけるみたいな言訳をするんだから。いい加減にしてよ、もう」

ラウンジの客たちが、びっくりして振り返るほどの声で、祐子は

叫んだ。叫んで、そのまま突き出した唇の先が、膨らんだり縮んだりする。組んでいた足も下ろして、真正面からぼくを睨み据えている。

ぼくは、祐子がそのまま膝の上のバッグを引き寄せ、テーブルのラケットと紙袋を掴んで、とび出して行くのではないかと思った。「ねえ」

しばらくの間、瞬きもせずにはぼくの顔を見据えていた祐子は、やがてゆっくり視線を逸らすと、コップに半分ほど残っているアイスティーを、一息に飲んだ。そして、急に思い詰めた表情になった。「わたしのアパートまで来て」

バスの中で、祐子は一言も口をきかなかった。開け放した窓から躍り込んでくる風に髪をなびかせ、じつと窓の外を見詰めていた。

祐子は先に部屋に入ると、開いていたカーテンを閉じた。そして、ぼんやり薄暗くなつた部屋にぼくを招じ入れ、化粧棚からブランデーをとり出した。

「お祝いをしたいのよ」

「お祝い」

「そう、三周忌よ」

「三周忌、お祝い」

祐子は答えずに、二つのグラスにブランデーを注いでいる。

「これ、まだ封を切ったばかりよ」

祐子は、ぼくのグラスに自分のグラスを合わせると、目を閉じて一口飲み込んだ。そして、喉が焼けそう、とふうつと息を吐いて、やわらかいウェーブのかかった前髪を掻き上げた。

「こんな話、どう。その子の父親はある都市銀行の支店長で、母親は書道塾の先生。なに不自由なく暮らしていたわけ。おまけに、その子の成績はかなりのものなの。数学の家庭教師もついていたわ。その家庭教師ったら、貧相な小男でド近眼なの。それでも、れっきとした大学の大学院生よ」

祐子はテーブルに肘をつき、指の中でグラスを揺らしながらいう。目は、そのブランデーの浮いたり沈んだりするあたりを、いたずらっぽく見詰めている。

「父親はいつも午前さま。母親だって、外から度々遅くなるっていう電話をかけてよこすの。でもその子、そんなこと別に気にもとめてなかったみたい。友達にも両親のこと、とても自慢してたのよ。」

ところが母親、そのうちに二まわりも若い副部長だとかいう男の人を、ときどき連れてくるようになったわけ。たいそう腕のたつ人だとかで、秋の文化祭の打合せなんだって。でも、考えてみたら、

まだ春が終ったばかりよ。その子、ときどき応接間に下りていつてみれば、母親たち、お習字の話なんかそっちのけで、お酒を飲んで音楽を聴いたりしてるといふの。大事な受験生の女の子がいる家で、それも十一時も十二時もまでよ」

祐子は、指を折って、天井の方を見ながらにかを思い出すしぐさをした。

「そして、六月の蒸し暑い日、そう十一時頃だったらしいわ。急に応接間が静かになったんで、あらあの人帰ったのかしらと思つて、トイレに下りていったわけ。それで、ふとなんの気なしに母親の部屋の前に立ったの。ドアを叩こうとして、あわててその手を引つ込めたのよ。」

瞬間胸がズキンときて、そのまま金縛りにあつたみたいに立ちつくしてしまつたというわ。いくら優等生だからといつたつて、いまなにながら始まつているかぐらいわかるわよ。

でも、その子もふうがわりな子なのよ。次の朝には、いつもと変わらない顔で母親に会つたらしいわ。そのかわり、例の大学院生とできたというわけ。そして、その大学院生は、その日でお払い箱。その子、涙もみせなかつたというわ」

「まさか」

「まあ、いやだわ。これ、友達に聞いた話よ」

祐子はケラケラと笑つた。面白そうに目を細めて笑いながら、また一口ブランデーを含んだ。

「でも、その子の気持、わかるんだ。こう、なんというかな、決して逆上したりしないのよね。それでいて、どこかに小さく燃えているものがあるんだ」

「ぼくにはわからないね。二重人格だか、三重人格だかわかりやしない」

「そんなに単純な図式で、女の子のことを考えるものではないわ」

「だって、君だって普段は」

「わたし。わたしはいつものとおりのわたしよ。ただ、その子の気持がわかる、といつてるだけなの」

そういいながら、祐子は小さくむせた。口元にハンカチを当てて、もう一方の手で胸を軽く叩く。白い首筋に、うつすら血の気がのぼってくる。

ぼくには、祐子の気持の中が読めなくなつてきた。マンドリンとテニスにばかり明け暮れていると思つていた祐子が、いつの間にかネガティブの方に退いて、反対に、不透明の覆いをまとつた祐子が、だんだん露に浮上してくる。ひよつとしたら、祐子は、ぼくなんかとは一まわりも、二まわりもスケールの違う大人であるのかもしれない。

ぼくは、まだ口をつけていないグラスを手にとると、その自分の幻影を振り払うように一気に喉の奥に流し込んだ。

「もう一つだけ、話していい」

胸のつかえがすっかり下りたのか、元のいたずらっぽい笑顔に戻って、祐子がいった。

「あのとき、邦彦さんの考えていたこと、わかってるわ」

「あのとき」

「三回目の座禅のとき。ほら、あなたが少し斜めにわたしに向かって」

「なにも考えちゃいないよ」

ぼくは、あやうくグラスを落とすところだった。あのときの動揺が、いつぺんに蘇ってきた。

しかし、あれは、ぼくの頭の中だけのことだ。祐子にわかる筈がない。おまけに、祐子は少し右肩を落としたまま、真直ぐに正面を見詰めていた。

「そう」

祐子は、少し悲しそうな顔をした。

「ぼくはうまくいってたんだ。すつきりと空っぽになってね。頭の中には、なにも浮かんでこない状態だった」

「無理しなくていいのよ」

そのとき、鱗を逆立て、脂ぎった目の色をあらわにした蒼黒い蛇が、熱い火の粉を吐きながらぼくの体の芯まで下りてきて、にわか

に反転を始めた。
ひよつとしたら、祐子の背中には、本当に黒子があるのかもしれない。

「鍵はかかっているわ」

祐子は、静かに目を閉じた。唇をいく分突き出し、胸の前で軽く両手を組んでいる。

次の瞬間、ぼくの体が祐子にぶつかって、その小さな唇を吸い、胸を押し開き、肌をあらわにしていく。

二階の大学院生が、何度も執拗な咳払いを繰り返す。咳払いと一緒に床も踏み鳴らす。その合間には、落ち着きなく部屋中を歩きまわる。本当に熊みたいな男だ。起きているときは、始終なにか物音をたてていないと、気が済まないらしい。

廊下を大股で歩く音がする。いったん玄関まで行って止まったかと思うと、どう気が変わったのか、また奥の方に引き返してしまう。

今日は、彼氏に会いに行くのをとり止めにしたのでろうか。

隣の工学部の男は、朝から出かけている。いま頃は機械油にまみ

れて、エンジンの下にでももぐり込んでいるのだろうか。あるいは、二、三人で賑やかに出て行ったから、どこかの工場見学でもしながら、例の早口でまくしたてているのかもしれない。

婆さんは、今日はどういうわけか、一回も姿を見せない。曲がりくねった廊下を掃きながら、わざとみたいにほうきの柄をドアに打ち付けるあの音がないと、かえって妙な淋しさを感じてしまう。ひとり言をいいながら通る、あのおきまりの「しかたがないねえ、もう」がないと、この下宿中がどこか雑然として、しまらない。

ぼくは酔っている。酔わずにはいられない心境なのだ。といって、飲んでいるわけではない。机の上のボトルは、いくら逆さまに振っても、一雫さえ落ちてきやしない。

寝転んだぼくの足元には、「なんとかザウルス」の詩を書き付けた紙片が、丸めて放つてある。

あの日、ぼくは、祐子の部屋から逃げ帰った。フラリと立ち上がって、一步、祐子に向かって進んだ。ところが、次の瞬間、ぼくの体はドアの外にあった。

どこをどう歩いて帰ったのか、知らない。気が付いたときには、この部屋に、こうしてひっくり返っていた。

ぼくの頭は、あのとときからずつと酔っている。いや、正気なのか、酔っているのかさえはつきりわからない。そのくせ、妙な感じどころかが醒めている。

蛇はもういない。火の粉を吐き、蒼黒い鎌首を振り立て、鱗を弾きとばしながら、ぼくの頭の中で「いまだ、いまだぞ」と激しくのたくっていたのだったが、いつまでも埒のあかないぼくに見切りをつけたのか、とうとう出て行った。

というより、ぼくはあの蛇にさえあいそをつかされてしまった。いま、そのぼっかり食い破られた頭蓋の中では、冷たい火の色をした燠が一つ、いつまでも変に燻り続けている。

ぼくは卑怯な男だ。唇を突き出し、目を閉じて待つ祐子の前から消えてしまった。「うわあ」と、声にならない声を発しながら、後ろも見ずに駆け出した。

ぼくは眠っていない。眠ってはいけなと思うている。「なんとかザウルス」の墜ちていく瞬間を見澄ましていなければならぬ。すでに、兆候はある。いや、兆候などなんの意味ももたない。

その瞬間は、いきなりやって来る。どこかで、眠たそうな声が囁くのだ。「食らうがいい。食らうがいい」と笑い始めるのだ。

ぼくは酔っている。酔って、あらぬことを口走ったりする。ときには鼻歌を歌ったり、先のちびた鉛筆で灰皿を叩いたりする。

「どこから来たのか。どこへ行くのか。みんな、どこから来たのか。俺たち、いったい、どこへ行こうというのか」

合間に、ぼくは一人、足を組み、指を印に結び、背筋を伸ばしてみる。そして、後頭部を突き上げ、目を精一杯開いて壁に視線を投げ、鼻から腹へ、腹から鼻へと呼吸を通わせてみる。

ぼくの目の前には、しらしらと伸びる国道がある。くねりのぼる細道がある。石ころだらけの急勾配を、背中から尻にまで汗を滴らせながら、ぼくがのぼっている。

少し遅れて、祐子の姿も見える。祐子は、豊かにカールしたやわらかい髪を、木立の間を吹き渡ってくる風に、涼やかになびかせている。

(了)